

ドーナツ穴謎に迫る

南山大研究者ら出版

ドーナツの穴とはいったい何なのか。一風変わった疑問の解明に、南山大学（名古屋市）の研究者たちが真剣に挑んだ『失われたドーナツの穴を求めて』（さいはて社）が出版された。ささいな謎に、歴史学や経済学、数学など様々な学問から迫る異色の内容で、知的好奇心を大いに刺激してくれる。

歴史学者は、ドーナツの穴の起源を探る。伝説では、19



大学でドーナツの穴の授業も行ったという芝垣准教授

「読売新聞（大阪本社）」2017年10月26日夕刊

世紀に米国のハンソン・グレゴリーという人物が最初に穴をあけたとされるが、証明する史料に欠ける。

そこで、注目したのがドーナツという言葉。米国では1809年に出版された書籍に初めて登場する。しかし、「丸めて揚げたもの」と説明され、穴には言及がない。ところが、77年の料理本や86年の新聞記事は穴に触れていることから、19世紀半ばから70～80年代までに穴のあいたドーナツが定着したといえるという。

言語学者は穴か輪かを議論し、数学者は穴の数学的な定義を考察。編者の同大学准教授で、米マサチューセッツ工科大客員准教授の芝垣亮介さんは『バカげたことを全力でやっている』と笑って感心してもらえればうれしい。学問する楽しさを知ってほしい」とする。類似本で、大阪大の教員が著した『ドーナツを穴だけ残して食べる方法』（大阪大学出版会）もあり、穴には研究者をひきつける何かがあるようだ。（原田和幸）